
世界で1番欲しいモノは君

朱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界で1番欲しいモノは君

【Nコード】

N6114C

【作者名】

朱

【あらすじ】

彼氏いない歴十六年の高校生サキ、その幼なじみの寿獅との関係は友達以上恋人未満。進展はあるのか？

『ねえ、サキはさ、好きな人いないの?』

そんなこといわれても。

『あたしそういうの興味ないから』

そう返せばあたしの右に座る親友の綾乃から不満げな声が聞こえた。
しょうがないじゃない、ほんとに無いんだから。興味。

結構長いため息をつきながらあたしは今年着たばかりの少しパリパリしてるスカートを折り曲げて机に座る。

『いーからそんな話』

もともと男っぽいあたしはそこら辺の女子と違って高校生(あーあもう16だよ、)になってまで全くといっていいほど恋愛に興味がない。

彼氏なんて作ったこともなくてつくろうと思ったこともない。まあよーするに一言で言っと、

「枯れて『サ〜キちゃん!』

『、、、、、、、、、はい?』

『あ、レオじゃん』

『ウッセーそのあだ名マジでやめろ』

都古 寿獅^{みゆしうじ}。あたしの小学生からの幼なじみで、とことん不良。頭は金髪で、制服はだらしないし香水臭いし。ほんとにまじでありえ

ない。

『名前に【獅】入ってるし髪型とかまんまライオンじゃん？だからレオ！』

綾乃は見下したように笑いながらそういった。おこりだす寿獅の頭を見て、たしかにライオンぽいなあ、、なんて考えたり。だまっ
て髪黒くしたらソコソコかっこいいのに。

中学二年で綾乃が加わって。恋愛経験豊富な綾乃はあたしにそういう系の質問しかしてこない。ハッキリ言っ嫌なんだけど、やっぱり綾乃だし、付き合ってやることにした。

『なあ、ふたりとも今から空いてるかあ？』

『いまから？、、へーきだけど』

『あたし無理！！ちよつと出掛ける用事あるから』

『そっか、じゃあふたりで、、綾乃がいないんならあたし行かない』

『、、、、、、』

なんか床にの字書き始めた寿獅をほっぽってあたしは何も付いてないかばんを肩に掛けて『またあした』それだけ言って教室をでた。

後ろからなんか騒いでる教師の声が聞こえたけどシカトした。あ、そっぴやまだら限目だった。あーもーめんどくさいなあ。

ちょっと考えてサボることにした。きつとあいつならサボるだろう
と思ったから。

なんであの馬鹿でウルサイライオンが脳裏に出てきたのかは知らないけど

二日後。

中間テストも近くなつて勉強モードに包まれる中、あたしは一人机
に突っ伏して寝ていた。

なんとなく寿獅のこえが聞こえたきがしてその方向に重い頭を回し
た。

『だからそこは――』

『あ、そっかあ！ありがとぉー』

、、、なあんだ。

あいつ彼女いるんじゃない。二人で勉強なんてかわいいーことしちゃっ
て。似合わないんだよその金髪には。

二人を見れば見るほど妙にイライラしてきて胸が締め付けられる感
じがした。

足元から沈みそうな感覚があたしをおそつて。わけも解らず顔を元
の場所にもどした。勢いありすぎて頭ぶつけたかな、、、それさえ
も考えたくなくて必死で眠りについた。

『おい、サキ』

『、、、んうー』

『起きろって』

『、、、あと三分、、、』

『、、、、、、、、、、、、』

『今すぐ起きねーとチューすんぞ』

ガバツ!!!!!!

『死ねっ!』

バコツと物凄いいい音がして精一杯力を込めたあたしのかばんは寿獅のあたまにヒットした。

『イッテー!!!!!!』

、、、な、なにも殴ることねーだろ!』

『じゃあ平手打ち?』

『あのなあ!』

寿獅は頭のとっぺんを両手で押さえながら涙目であたしを見た。おまえいくつだよ気持ち悪い。

あたしは自分的に1番怖いだろう睨み方をして。

『キモいこと言っなっ!』

眠る前のイライラと今の胸の高鳴りをどう説明しようか。今までのあたしならこんな風にはならないのに! (コイツのこういう発言は日常茶飯事だ。)

ああ もう! 何なのよ!

『あたし帰る!!--』

ガタツと机と椅子を鳴らせて勢いよく立ち上がる。

『帰るっておまえ、もう七時半だぞ?』

『、、、、、、へ』

『だから、おまえが真昼からいままですっと寝てたってこと。』

寿獅は淡々と混乱するあたしに解りやすいようにそう言ってくれた。

『、、、綾乃は?』

『帰った。用あるんだと』

『、、、へえ』

このあたしのいかにも不機嫌な声。寿獅もあたしも黙りこくって、二人の間には沈黙が流れ出す。

その沈黙を破ったのはあたしじゃなくって。

『帰るぞ』

『え』

『送るから』

いきなり腕を掴まれて引つ張られるままについていく。頑張って速足で歩くけど、やっぱり男だから寿獅のが速くて。

寿獅があたしの腕を掴む手に力を入れるたびに胸が苦しくなった。

『ねえ、寿獅、速いよ』

家に着くまでに何回話し掛けただろう。それでも返事は全然なくていつものウルサイ寿獅じゃなくって正直怖かった。

結局一言も話さないままであたしの家に着いた。

『、、、』

あたしはこの空気が重たくて何も言えなかった。寿獅はなにか考え込むようにして目を伏せていて。

『、、、サキ』

不意に自分の名前が呼ばれて、その声の発信源に目を向けた。

『なに?』

そう言おうと口を開いた瞬間、あたしは抱きしめられていた

『な、に、、? 寿獅?』

『悪い、急に。でも聞いてくれ』

『、、、うん』

煩いほどに胸は高鳴って、返事するので精一杯だった。少し耳を澄ますとあたしと同じくらい速い寿獅の心音が聞こえてきて、なんだか解らないけど無性に嬉しくなった。

『俺さあ、中学一年のときお前に惚れてたんだ』

『、、、初耳』

『だろうな、誰にも言っていないから』

寿獅は少し笑いながらそういった。確かに初耳だった。だけど『惚れてた』その言葉が過去形になってることがなぜだか哀しくて。

『離して』

『最後まで聞け馬鹿』

寿獅は自分の胸板を押しているあたしの手をいとも簡単に元の位置に戻した。

『今でも、っか今までずっと好きだった。もちろんこれからもだけれどだから、

、、、俺だけの女の子になってください。』

、、、恋愛なんてくだらない。あたしにはそんなの関係ない。

そう思ってた。ずっと。

まっすぐあたしを見つめる寿獅の顔は、今までで1番かっこよくて凜としていた。

くだらないと思っていた恋愛が、君の言葉でこんなにもキレイに思えてくる。最高に幸せなモノだと思えてくる。

ねえ、愛しい人

傷を負わない恋なんてこの世にはないけれど、

やってみようか無傷の恋

あたしが夢に見た甘い恋、

君とならいいかって

思ってたんだ

（後書き）

初めて書いたんですけど、どうだったでしょうか、、これからも
頑張っていくので宜しくお願いします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6114c/>

世界で1番欲しいモノは君

2010年10月9日14時00分発行